

令和 3 年 6 月 30 日現在

機関番号：34312

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02701

研究課題名(和文) 言語欺瞞コミュニケーションの認知語用論的分析と欺瞞回避の実践訓練法構築

研究課題名(英文) Cognitive-Pragmatics Approach to Evasive Communication

研究代表者

小山 哲春 (KOYAMA, Tetsuharu)

京都ノートルダム女子大学・国際言語文化学部・教授

研究者番号：60367977

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：「言い逃れ・遁辞」(evasion)に焦点をあて、その推論プロセスに関して社会認知語用論の枠組みでの理論的モデル構築し、発話行為成立に参与する個人要因(認知複雑性等)の影響についての実証的検証を行った。成果、(1)Evasionは会話フレームの意図非明示的なシフトにより、シフト後の会話フレームの中で誤推論を誘発されて成立する、(2)言い逃れが与える「言い逃れ感」「欺瞞感」は、当該メッセージの「誠実性」と強く相関し、その感覚の鋭敏さは認知複雑性や視点取り込み能力と相関する、ただし(3)日本語話者については、認知的複雑性と高度な「言い逃れ」戦略使用が相関するわけではないこと、等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言い逃れ・遁辞(Evasion)は、聞き手に発話意味を誤解させることで成立する現象であり、欺瞞意図を同定することが非常に難しく、法的・道義的責任の所在が曖昧となる点で特徴的である。こうした欺瞞は詐欺や誇大広告に代表される違法なメッセージから、政治家や企業トップの巧みで人を煙に巻くような謝罪会見や言説、そして日常生活における罪のない嘘・ごまかしまで、様々な形で現代社会に蔓延しており、それが社会や我々一般市民に与える潜在的影響に鑑みれば、そのメカニズムを語用論的・社会心理(コミュニケーション)学的に解明してその成果を社会に還元する学術的意義および社会的貢献は非常に高い。

研究成果の概要(英文)：The project has revealed that (a) Verbal Evasion is achieved through the false implicature that the message satisfies the original conversational demand when the message actually satisfies a different demand in a misrepresented conversational frame, (b) Perceived deceptiveness and perceived evasiveness are significantly correlated with perceived sincerity of the message, and the sensitivity to deceptiveness and evasiveness depend on cognitive complexity and perspective-taking ability of the hearer, and (3) among native speakers of Japanese, cognitive complexity would not necessarily predict the use of strategic evasive messages in conflict-avoidance situations.

研究分野：コミュニケーション学

キーワード：欺瞞 コミュニケーション 推論 社会認知

1. 研究開始当初の背景

ことばによる欺瞞(verbal deception)は、一般的には3種類に分類されるが((a)意図的に虚偽の情報を提示する「嘘(lies)」、(b)情報を意図的に隠す「隠蔽(concealment)」、そして(c)巧妙に焦点をずらす「言い逃れ・遁辞(equivocation)」(Burgoon, et al., 1996)、このうちの(c)言い逃れ・遁辞は聞き手に発話意味を誤解させることで成立する現象であり(Jacobs, 1995)、欺瞞意図を同定することが非常に難しく、法的・道義的責任の所在が曖昧となる点で特徴的である。こうした欺瞞は詐欺や誇大広告に代表される違法なメッセージから、政治家や企業トップの巧みで人を煙に巻くような謝罪会見や言説、そして日常生活における罪のない嘘・ごまかしまで、様々な形で現代社会に蔓延しており(Galaginski, 2000)、それが社会や我々一般市民に与える潜在的影響に鑑みれば、そのメカニズムを語用論的・社会心理(コミュニケーション)学的に解明してその成果を社会に還元する学術的意義および社会的貢献は非常に高い。

言語的欺瞞に関する先行研究には3つの問題点が指摘できる。第一に、欺瞞を検出するための言語・非言語的特徴については膨大な文献があるが、言語的欺瞞が成立する認知メカニズムや参与者の個人能力に関する実証的研究は充実していない(村井, 2005)。欺瞞を話し手の情報操作の観点から分析した研究はあるが(McCornack, 1992; 他)、聞き手の認知(推論)にまで踏み込んだ研究は少ない。第二に、「遁辞・言い逃れ」に焦点を当てた研究はほとんど見当たらない。第三に、社会科学的研究成果を基にした欺瞞回避のための訓練法構築を試みたケースは皆無である(大坊 2005)。これらの問題点を総合すると、特に Equivocation に関するコミュニケーション能力研究はこれから基礎/応用研究を必要とする黎明段階にあると言える。

2. 研究の目的

このような背景と危機感に基づき、本研究は主に「言い逃れ・遁辞」に代表される欺瞞現象に焦点をあて、これを「誤推論を介した欺瞞(Deception through False Implicature: DtFI)」と定義し、その推論プロセスに関して社会認知語用論(Tomasello, 2008 他)の枠組みでの理論的モデル構築、および、発話行為成立に参与する個人要因(認知複雑性等)の影響についての実証的な検証を目的とした。

3. 研究の方法

- (1) DtFI 産出・解釈傾向の検証：理論構築の基盤として、DtFI の様々な類型に関して、その産出傾向、および、効果(受け取り手の受ける印象)を擬似実験的な手法で観測し、どのようなDtFI メッセージデザインの効果が高いと判断されるか、統計的 Message Effect 分析(Jackson, 1992)を用いた分析を行った。各変数の測定には、先行研究で幅広く利用されている Elicitation Task 法(周到にデザインされた具体的な状況を文章で提示し、被験者にその状況で自らが実際に使用するメッセージを想起し、詳細に記述するよう求める)を用い、得られた回答は、それぞれの変数ごとに用意されたルーブリック式評価表に従って、一定期間のトレーニングを積んだ複数の評者(応募者および研究助手)によって評価された。
- (2) DtFI の産出・解釈能力に関連する個人要因の探索調査：対人コミュニケーション能力の基盤に認知的複雑性(cognitive complexity)や視点取込み(perspective taking)能力があり(Burleson & Caplan, 1998)、また自分や他人のコミュニケーションスタイル(MDL)に関する理解(O'Keefe & Lambert, 1995)などが深く関わりと仮定し、これが DtFI の解釈に与える影響を検証した。サンプルの DtFI 産出管理・解釈能力、認知的複雑性・コミュニケーション・スタイルを測定し、変数間の相関(共分散)分析を行った。各変数の測定には、先行研究で幅広く利用されている Elicitation Task 法(周到にデザインされた具体的な状況を文章で提示し、被験者にその状況で自らが実際に使用するメッセージを想起し、詳細に記述するよう求める)を用い、得られた回答は、それぞれの変数ごとに用意されたルーブリック式評価表に従って、一定期間のトレーニングを積んだ複数の評者(応募者および研究助手)によって評価された。
- (3) 認知メカニズムのモデル化：言語学(語用論)、社会心理学(コミュニケーション学)、社会認知語用論(Tomasello, 2010 他)という枠組みで、DtFI における(誤)推論の言語理論的説明(モデル)と言語学的分析を行った。

4. 研究成果

[1] DtFI 産出・解釈傾向

回避-回避型葛藤場面(Avoidance-Avoidance Conflict Situations)でのメッセージ産出では、弱いながらそれぞれ統計的に有意な傾向が観察された(表1参照)。

表 1. 回避-回避葛藤場面におけるメッセージ産出傾向

/Table 2. Means and Standard Deviations for each Message Types (Solicitation / Definition)

	Solicitation			Multiple Choice		
	Frequency	Cognitive Complexity		Frequency	Cognitive Complexity	
		M	SD		M	SD
1. Direct Answers: Bald	2	18.0	5.66			
2. Direct Answers: w/ Politeness	12	15.08	7.20			
3. Lies (White Lies)	35	14.80	5.89	51	15.29	7.44
4. Direct Opting Out	0	-	-	2	23.50	7.68
5. Indirect Opting Out	7	14.43	5.29	22	14.23	6.60
6. Indirect Answers	40	16.73	9.11	33	18.52	9.12
7. Covert Evasion	46	17.87	9.11	34	17.00	6.35
Total	142	16.40	7.73	142	16.40	7.73

Notes:

Solicitation Message Type: $F_{(5, 135)} = .83, n.s., \eta^2 = .03$; Gender (covariance): $F_{(1, 135)} = .30, n.s., \eta^2 = .00$
 Multiple Choice: Message Type: $F_{(4, 136)} = 1.86, n.s., \eta^2 = .05$; Gender (covariance): $F_{(1, 136)} = .39, n.s., \eta^2 = .00$

自由産出課題(Solicitation Task)では、「嘘(white line)」(24.8%)、「間接回答(indirect answers)」(28.3%)、および「意図非明示的言い逃れ(covert evasion)」(31.7%)傾向が高く、これらの傾向に性別との交差効果は認められなかった。選択課題(multiple choice task)でも基本的に同様の傾向が確認されたが、一定数が「間接的回避(indirect opting out)」を選択するという違いが見られた。回避-回避葛藤場面におけるメッセージ選択肢が、(他のいかなる場面での選択肢もそうである様に)必ずしも排他的なカテゴリーを形成しておらず、協調的コミュニケーションと非協調的コミュニケーションはむしろ連続的なカテゴリーを形成する点は協調されるべきである。

「意図非明示的言い逃れ (Cover Evasion)」の解釈に関する探索的調査として、7種類の言い逃れメッセージタイプを検証した結果、当該の発話を欺瞞的に感じる主要因として「欺瞞性(deceptiveness)」と「言い逃れ性(evasiveness)」が共變的に関係していることが明らかとなり、また、この2変数に影響する主に概念として主に「誠実性(sincerity)」が存在することが明らかとなった (図 1. 参照)

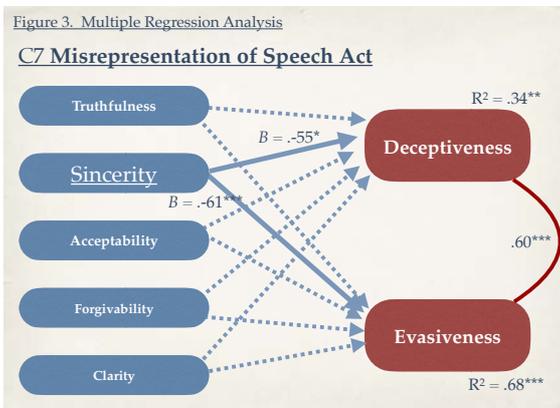


図 1. 言い逃れ (Misrepresentation of Speech Act) におけるメッセージ解釈に関わる諸要因の関係

[2] DtFI 産出・解釈傾向の個人要因

上記で得られたデータを基に、回避-回避葛藤場面におけるメッセージ選択の分布、および、認知的複雑性とメッセージ選択の関係 (性別=共変数) について分散分析を行なった結果、いずれの場合にも全体として統計的に有意な結果は得られなかった (Solicitation: $F_{(5, 135)} = .83, n.s., \eta^2 = .03$; Multiple Choice: $F_{(4, 136)} = 1.86, n.s., \eta^2 = .00$) or effect of Gender (Solicitation: $F_{(1, 135)} = .30, n.s., \eta^2 = .00$; Multiple Choice: $F_{(1, 136)} = .39, n.s., \eta^2 = .00$)。 (図 2 参照)

ただし、自由産出課題においては「間接回答(indirect answers)」および「意図非明示的言い逃れ(covert evasion)」産出者の認知複雑性が相対的に高く、「嘘(white lie)」や「間接的回避(indirect opting out)」産出者において低い傾向が観察された (図 3 参照)。これらの傾向にはいくつかの解釈が可能であるが、特に日本人話者の間では、非意図明示的言い逃れが必ずしも回避-回避葛藤場面を意図的に別の場面へとすり替える「言い逃れ」としての戦略 (strategy)として用いられているわけではなく、あくまでもメッセージを曖昧なものとするその場限りの手段として用いられている可能性が示唆される。いずれにせよ、White Lie や Indirect Opting Out といった、葛藤を避けて向き合わないタイプのメッセージに比して、Indirect Answer や Covert Evasion といった聞き手に対してそれぞれ協調的/非協調的に働きかけ、目的に沿った含意推論を誘導した

り、会話フレームをシフトするようなメッセージを選択する回答者の認知的複雑性が高くなっている点もやはり無視できない。非協調的コミュニケーションの実現には認知負荷がかかり、高度な認知能力が必要とされることが示唆されたと考えられる

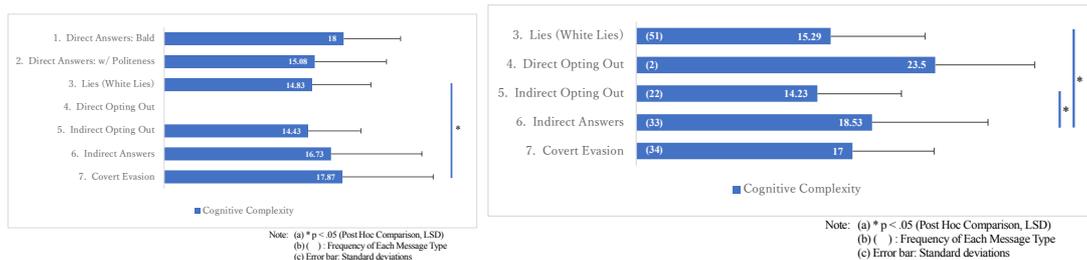


図 2. 回避-回避葛藤場面におけるメッセージ産出傾向と認知複雑性の関係 (左: 自由産出タスク; 右: 選択肢タスク)

また、上述の「欺瞞性」「言い逃れ性」への敏感度(sensitivity)に関しては、「対人認知複雑性」と「視点取得能力」の高さとある程度の相関が認められたものの、興味深いことに、特定の発話行為のタイプについて異なる相関が観察された (図 3 参照) .

Figure 1. Correlations between Cognitive Complexity and Message Perception

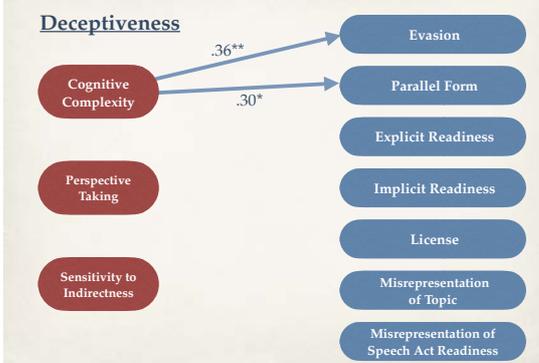


Figure 2. Correlations between Cognitive Complexity and Message Perception

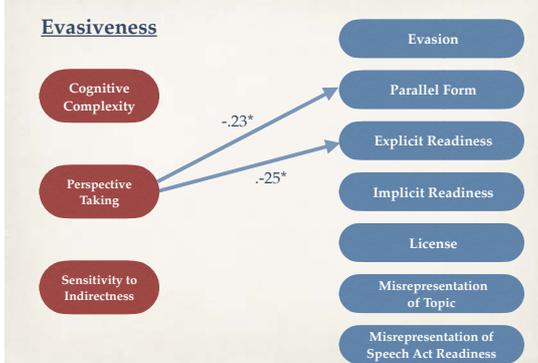


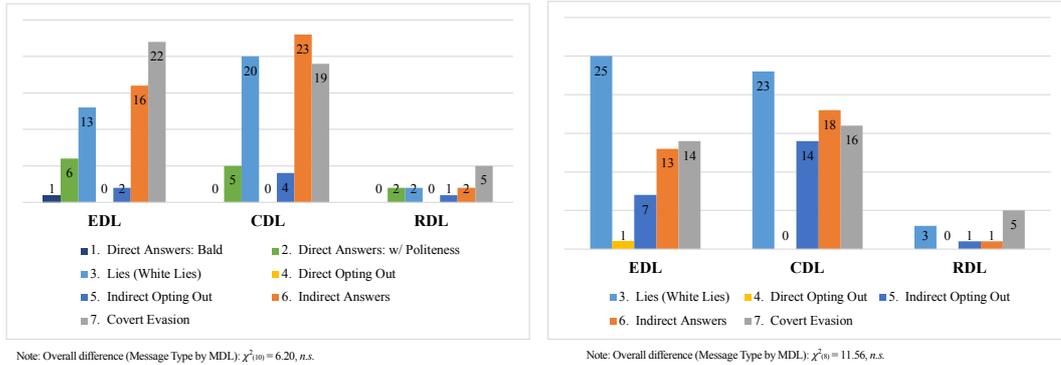
図 3. 様々な言い逃れのメッセージタイプに関する「欺瞞性」(左図)と「言い逃れ性」(右図)の感受に影響をおよぼす個人認知要因

す個人認知要因

この観察結果から直ちに一般化可能な解釈を導き出すことは困難であるが、対人認知の中でも相手を分析的に認知する能力である認知複雑性と、あくまで共感的な視点で相手の理解を志向する「視点取得能力」がある程度の独立性をもって機能し、さまざまなタイプの非協力的発話行為の解釈に影響を与えていることが示唆されたと考えられる。

さらに、個人の一般的なメッセージ産出スタイル (Message Design Logic) と言い逃れメッセージ産出の関係について分散分析を行なった結果、本研究で構築した理論的仮説 (「Rhetorical Design を有する話者が相対的に「言い逃れ」方略を多用する))とは異なり産出タスク、選択タスクのいずれにおいても異なるコミュニケーションスタイル間でのメッセージ産出傾向の有意な差は検出されなかった (図 4. 参照) .

しかし、日本人話者における Rhetorical Design Logic 保有数が圧倒的に少ない (ただし、認知複雑性は英語圏と比較しても比較的均質に分散している) 事実を勘案すれば、日本人話者においては戦略的コミュニケーションの重要度が低く見積もられている可能性が指摘され、その結果、Rhetorical Design Logic 保有者もむしろ「戦略的に「戦略的コミュニケーション」を多用しない」傾向にあることが示唆される。この現象の解明は今後の重要な課題である。



Note: Overall difference (Message Type by MDL): $\chi^2_{(6)} = 6.20, n.s.$

Note: Overall difference (Message Type by MDL): $\chi^2_{(5)} = 11.56, n.s.$

図 4. 回避-回避葛藤場面におけるメッセージ産出傾向と Message Design Logic の関係 (左：自由産出タスク；右：選択肢タスク)

[3] 言い逃れ発話成立の認知メカニズムのモデル化

現実世界における様々な言い逃れ現象について談話分析的手法を用いて詳細な記述を行い、特に Galaginski (2000)の Meta Discursive Strategies という概念を援用して認知語用論的な観点からモデル化を試みた。

まず、非意図伝達の言い逃れ発話は、当該の発話(Pair Part 2: PPT2)が、実際に用いられている会話フレーム(Original Conversation Frame)においては隣接ペアをなす直前の発話(質問)(Pair Part 1: PPT1)の会話の要求(conversational demand)を意味論的にも語要論的にも満たしていないにも関わらず、話者による意図非明示的会話フレームシフトが行われた結果、あらたに提示された新しい会話フレーム(Activated Conversation Frame)の中で別の隣接ペアの PPT1 として適切に機能することで生じる現象であると規定した。Activated Conversation Frame はあくまで意図非明示的かつ隠密に活性化されるため、聞き手はこの会話フレームにおける意味論的または語要論的な隣接ペアの達成を Original Conversational Frame での隣接ペア達成と誤認し、結果として会話の要求が意味論的・語要論的に適切にしたと誤認していると結論づけ、この現象を Falsely Perceived Conversation Frame における False Implicature の成立、という概念で記述した。(図 5 を参照)。

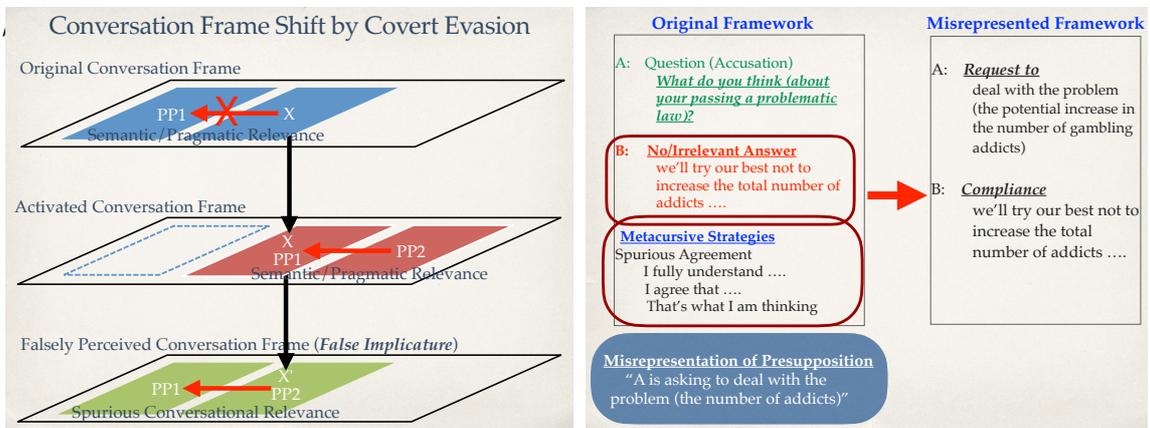


図 5. 非意図明示的言い逃れ (Covert Evasion) の成立メカニズム

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Tetsuharu Koyama	4. 巻 7
2. 論文標題 Covert Evasion as Uncooperative Communicative Act (Report)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in Language and Culture, Kyoto Notre Dame University	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 TETSUHARU KOYAMA	4. 巻 6
2. 論文標題 Covert Evasion in Avoidance-Avoidance Conflict Situations: A Preliminary Study of the Effect of Cognitive Complexity and Communication Style on Japanese Speakers' Message Choices.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Studies in Language and Culture	6. 最初と最後の頁 43-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小山哲春
2. 発表標題 メッセージ効果 対立回避状況でのメッセージ選択戦略：認知複雑性とコミュニケーションスタイルの影響
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会 関西支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小山哲春
2. 発表標題 コミュニケーション研究としての「コックイオンドク」
3. 学会等名 第48回日本コミュニケーション学会年次大会（パネル）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tetsuharu Koyama
2. 発表標題 Covert Evasion as Uncooperative Communicative Act: Theoretical and Empirical Analyses of Japanese Speakers' Message Choices in Avoidance-Avoidance Conflict Situations
3. 学会等名 The fourth American Association of Pragmatics (AMPRA4) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小山哲春他 (児玉一宏・谷口一美・深田智 編著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 はじめて学ぶ認知言語学-ことばの世界をイメージする14章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------